



Title	北海道大学法学部法学会記事・あとがき
Citation	北大法学論集, 23(4), 205-206
Issue Date	1973-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/27941">http://hdl.handle.net/2115/27941</a>
Type	bulletin (other)
Note	雑報
File Information	23(4)_P205-206.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学法学部法学会記事

○ 昭和四七年二月一日(金)午後四時—六時半

「現代社会と技術」

報告者 山田 圭 一氏  
出席者 一八名

今回は特別例会として、東京工業大学助教授の山田圭一氏に表記のようなテーマで、日頃自然科学とは御無沙汰がちな我々にとって、大変興味深い話をうかがった。山田助教授は自らの外遊体験に即して、一九六〇年代後半以来科学技術の転換期という自覚が各国で高まって来たこと、科学技術の新しい方向づけへの模索がつつけられている点を前向きとして述べ、ついで現在の科学技術の問題点として左のような諸点を指摘された。

まず大戦後から一九五〇年代にかけて躍進して来た技術革新の波が、一種の停滞期に入っていることである。表面的には研究者・論文等の数は多いが、画期的といえるものはほとんどない。もっとも報告者によれば、これは一種の周期的現象として、規則性をもった停滞現象であり、又停滞はすべての分野に一樣に存在するというものでもないという。しかし従来の科学技術の発展を支えてきた「big science」について、たとえば十兆円もの金を使って月へ人を送ることにはいかなる意味があるか、とか、軍事的利用との関連等について深刻な反省が生じてきており、また private sector と public sector での技術開発の極端なアンバランスへの

批判も高まり、要するに科学技術の進歩それ自体を善とするオプティミズムから、科学技術の目的意識的統御への転換、いいかえれば seed 志向に対する need 志向の強調が顕著であるという。もっとも報告者はこの二つの志向の間にはバランスが必要であり、現在では振子が逆の方向にゆれすぎている、と考えておられるようである。

ついで研究教育におけるインター・ディシプリナリーの問題にふれ、アメリカなどでは研究開発の社会的役割・組織のあり方・コミュニケーションのあり方等をめぐって、Science of science, Research on research, への志向が強まっているが、日本ではこの点全くおくれいている点が指摘された。

さらに右に関連して研究開発活動のライフサイクルの問題がとり上げられ、組織の永続をテーマとする研究組織(たとえば講座制)が、いかに研究開発の桎梏となってくるかが指摘された。

又科学技術のもたらすマイナス効果について、新しい研究プロジェクトの発給にさいしそのあり得る社会的影響を考えるというやり方(technology assessment)が一般化して来ている(アメリカ)が、これにも価値の多元性がらくる価値判断のコンセンサスの困難、マクロな意志決定とミクロのそれとの関連で多数決原理が使えない、という問題がある。たとえば騒音の直接被害者は少数であり、この場合には福祉のミクロな配分こそが問題というわけである。(以上報告内容の文責は編集委員にある)。

以上のような多岐にわたる興味深い報告に対し、出席者からも多様な質問がよせられ、Research on research にもライフサイクルはあるか(報告者の考えでは十年位という)、private sector と public sector との関連をめぐる問題、社会主義体判における問題はどうか等々が話題となった。

次号(第二四卷)予告

論 説

四十六年度参議院選挙における札幌市住民の投票行動 (一)

荒木俊夫

フランスにおける教育自由法理の形成 (二)

中村睦男

株在の解散判決請求権 (三・完)

青竹正一

資 料

西ドイツ民訴三三三條の訴について

小山 昇

選挙戦中における争点への関心の変化

小川 晃一

研究ノート

比較法研究ノート

五十嵐 清

あとがき

○そこはかとなげ感傷の三月。浮き世、すなわち憂き世の思ひは、編集子として例外ではない。

○ともあれ本年度分四冊、まずは大過なく(?)世におくりえたことを、執筆者はじめご協力いただいた諸賢各位にふかく感謝申しあげる。分量的には当初の予定を大幅に下回る結果となったが、締切りまぎわの辞退、その他の不如意が偶々競合したため、長期的には、なお、大量蓄積⇨大量放出過程の渦中にあるものと見たい。その意味で、かような豊饒現象に付随するものもろの問題(二巻四号あとがき参照)は、依然未解決のまま今後持ちこされることになる。

○本誌の生命は、いうまでもなく「量」よりも「質」の維持にある。誌上を飾る二十余年の業績について、その学問的貢献度を、それぞれの分野でフォローしてみるのも一興であろう。

○各位のご健勝を祈りつつ、退任の弁に代える。

(K)